

## アルブレヒト・アルトドルファー 《エジプト逃避途上の休息》の泉について

藪田 淳子（神戸大学）

アルブレヒト・アルトドルファーの《エジプト逃避途上の休息》（1510年、ベルリン絵画館）は、「エジプト逃避」の主題にみられる要素の多くが不足していることから、その主題の妥当性が長年議論されてきた。画中で何よりも特徴的なのは、聖母子の傍らに描かれた大きな泉である。今までは泉の意味が総論的に述べられるのみで、具体的な図像伝統の中で、個々のモチーフについて十分に議論されてきたとはいえない。

もっとも頻繁に論じられてきたのは、泉の頂点に立つ男性像と少年像の意味についてである。この泉について網羅的に解釈したトーマス・ノルは、羽のついた天球を持つ男性像は肉欲の擬人像であるとした。また、泉は「バテシバの水浴」や「ピュラモスとティスベ」に描かれる愛の泉を意味するとし、肉欲の愛を表す異教像と、神の愛を表す神の母が、聖愛と俗愛の対比として描かれているとした。しかし本作品の泉は、生命の泉の意味を持ち、男性像は世俗の愛というよりも、隣に立つ目隠しの少年像とともにアモルとフォルトゥナとして描かれたと考えられる。イタリア北部のマイスターの版画《フォルトゥナ》に描かれたように、男性がもつ有翼の天球は、それだけでフォルトゥナの意味を表すからである。

また、アルトドルファーは1511年の銅版画《球体に乗るフォルトゥナ》で、有翼の女性が球体に乗る姿を、盲目のアモルと組み合わせて描いた。この二つの像は、それぞれ運命の移ろいやすさと、地上の愛を戒める教訓的な意味を表す図像であった。本作品にはアルトドルファーのモノグラムとともに聖母への信仰心が画中の銘文に記されており、画家自身が教訓的な意味を含めてこのような泉を描いたと考える。

本作品のように聖家族が泉とともに描かれる例は稀であった。しかし、アルトドルファー作品と同年の1510年、ヤン・ホッサールトは《聖家族と泉》を描いている。これはファン・アイクの《泉の聖母》がネーデルラントで受容された結果であったと考えられる。「泉の聖母」という図像は、聖母崇敬の高まりとともに、「閉じられた庭」や「一角獣と聖母」といった形で15・16世紀に絵画化された。さらにドイツでは、受難のキリスト像への崇敬から、箱型の泉の水盤の上に悲しみの人が描かれた「恩賜の泉（fons pietatis）」の版画が流行している。

本作品の泉は、先行研究でも指摘されたように、装飾上はルネサンス時代のイタリアの版画の影響があったとみるのが妥当であろうが、教義上では、ネーデルラントの「泉と聖母」の系譜を引くと思われる。1500年前後の教会壁画や祭壇画の「一角獣と聖母」の作例を見ると、泉のモチーフが重要性を持って描かれており、聖母の象徴としての泉は、様々な形で途切れることなく描かれてきたのがわかる。こうした伝統によって、本作品のような泉が描かれたのだと結論づけたい。